



第15回 「音の匠」澤登 翠さん インタビュー

音の日実行委員長
森 芳久

はじめに

日本オーディオ協会では、毎年12月6日『音の日』の大きなイベントの一つとして、『音』を通じて技術や文化など私たちの生活に貢献した方々を『音の匠』として顕彰し、広くご紹介してまいりました。

昨年末『音の日』には、無声映画の活動弁士として国内はもちろん海外でも活躍され、その日本独自の伝統芸能を今に伝え続けてこられた、澤登翠さんを2010年度『音の匠』として顕彰いたしました。



澤登さんと「音の匠」の顕彰楯

無声映画と活動弁士

無声映画では、当然のことながら音声は再現できず、必要最小限の台詞が字幕で補われ、また簡単な説明役としての弁士の存在がありました。しかし、

日本で初めて映画が上映されたとき、まだ国産の映画は制作されておらず、洋画のみでした。当然外国語字幕は用をなさず、必然的に活動弁士が日本語で台詞を語っていたのです。

「おー、メリーさん、メリーさん、僕は貴女を愛します」。活動弁士は一段と感情を込めて愛を表現し、バックには「ジンタ」と呼ばれる楽隊の奏でる『ドリゴのセレナーデ』の甘いメロディーが場を盛り上げます。観客は活動弁士の話芸に酔いしれ、銀幕の中の夢の世界に誘われていきました。無声映画時代には、活動弁士もまた銀幕の俳優とならぶスターだったのです。

当時は、徳川夢声はじめ、多くの名活動弁士が活躍し、映画そのものもさることながら、著名活動弁士に客が集まるという現象が起こっていたのです。そこで、活動弁士は単なる映画解説者ではなく、映画の主演俳優に声を与え、その声音で感情表現を補完、増幅する役目を担い、また一人で複数の俳優の声を使い分ける名人芸を磨くことになりました。

これは、欧米の無声映画の世界とは一線を画し、日本独自の芸能として発展をしていきました。日本でも素晴らしい無声映画が数多く作られ、そこでも活動弁士の果たした役割は大きく、映画文化に大きな花を咲かせました。

やがて、トーキー時代が到来、さらに総天然色映画などの登場により、無声映画は徐々に姿を消していきました。それに伴い、活動弁士たちも激減してしまいました。特に、戦争中に多くの貴重な無声映画が失われてしまったのです。

幸い、活動弁士として著名な松田春翠氏の尽力により、各地に散逸した貴重なフィルムが収集され、1959年、同氏が会長を務める「無声映画鑑賞会」が

スタートし、定期的な公演が続けられることになりました。

おかげで、我々は今日もその古き善き伝統の「無声映画」と活動弁士の芸能を堪能することができるのです。

『音の匠』澤登翠さんのご紹介

澤登翠さん^{*1}は、法政大学文学部哲学科卒業後、故松田春翠の門下に入門、1973年に活動弁士としてデビュー、日本を代表する弁士として国内はもとより、海外でもその話芸の評価は高く、文化庁芸術祭優秀賞他数々の賞を受賞されています。

恩師松田春翠氏より引き継いだ「無声映画鑑賞会」は、この1月には第630回を迎えました^{*2}。また、澤登翠さんの門下には、片岡一郎さんをはじめ、素晴らしい弁士たちが育ち活躍をされています。

澤登翠さんとのショートインタビュー

—まず、活動弁士になられた動機からお訊ねいたします。—

(澤登) そうですね、まず、古典的な映画が好きだったこと。なにかを表現する仕事があったこと。そして、なんといっても、故松田春翠先生の活弁と楽団の演奏を聴き、その語りと音楽が、無声映画と有機的に結びついた活動写真の臨場感に魅了されたことが、大きな動機です。1972年秋のことでした。

—それでは、恩師の松田春翠氏について、一言お願いします。—

(澤登) 申し上げたいことは沢山ありますが、一言ということでしたら、「フィルム収集に情熱を傾け、お亡くなりになる前日まで、重篤のお身体にもかかわらず、弁士を務められた凄い方。稀代の名弁士」と申し上げたいです。

—活動弁士にもっとも必要な素養とは。—

(澤登) 他のアートとも共通すると思いますが、豊

かな感受性、映画から感じたことを美しい言葉に表現する力ではないでしょうか。

—活動弁士として、もっとも必要な心がけは。—

(澤登) 映画をいかに理解するか、映画への理解力だと思っています。

—いままで、もっとも感動したできごと、また困難だったことは。—

(澤登) 感動するできごとは、毎日のように起こっています。そうですね、古くは1973年1月、紀伊国屋ホールで弁士をデビューさせていただいたとき、『チャップリンのスケート』を語り終えた直後に、客席から戴いた温かい拍手。そのときから今まで、ファンの方々の支えを実感したときでした。

また、フランス、アメリカ、イタリア、ドイツ、ベルギー他、海外公演での多彩な反応や感想。「日本の弁士のパフォーマンスを通して、我々は無声映画の新しい見方を発見した」との言葉は私の宝物となりました。そして、直近では、昨年12月6日『音の匠』として顕彰していただいたこと。今後の活動の大きな励みとなりました。

困難だったこと・・・、根が明るくボウーとしているのか(笑い)、それほどありませんでした。

—お好きな映画は、また俳優、監督などもお聞かせください。—

(澤登) ドイツの無声映画で、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ムルナウ^{*3}、フリッツ・ラング^{*4}、ヨーエ・マイ^{*5}など個性の際立つ監督たちの独特の暗さを秘めた憂愁漂う詩的なモノクローム映像。特に、ムルナウの『ファウスト』、ラングの『ニーベルンゲン』などは素晴らしいです。

また、アメリカの無声喜劇スター、ハリー・ラングドン^{*6}の作品。赤ん坊みtainなキャラクターの摩訶不思議なラングドン、大好きです。グレタ・ガルボ、ルイーズ・ブルックスなどの名スターも名前を挙げずにはいられません。

—映画以外の趣味についてお聞かせください。—
 (澤登) 絵画鑑賞、猫ウォッチング、散歩、読書、音楽鑑賞、クラシックからロックまでジャンルを問わず聴いています。

—澤登さんにとって、一言で表すとしたら無声映画とは。—
 (澤登) 無声映画とは、それは「夢」です。

—最後に、後進に期待することは。—
 (澤登) 人間と社会への興味を持ち続けてほしいと願っています。

—澤登さんの今後のご活躍、そして無声映画、活動弁士の伝統芸能の発展をお祈りいたしております。本日はありがとうございました。—
 (澤登) どうもありがとうございました。



「音の匠」顕彰式で挨拶される澤登さん

- *1 日本オーディオ協会「音の匠」の紹介ページ
<http://www.jas-audio.or.jp/event/sound/takumi2010.php>
 澤登翠さんのホームページ：
<http://sawatomidori.com/afternoon.html>
- *2 「無声映画鑑賞会」は株式会社マツダ映画社の運営で毎月開催されています。
<http://www.matsudafilm.com/>
- *3 フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ムルナウ (Friedrich Wilhelm Murnau, 1888~1931) ドイツ出身の映画監督。サイレント時代の巨匠。「ファウスト」(1925~26) など。
- *4 フリッツ・ラング (Friedrich Christian Anton "Fritz" Lang, 1890~1976) オーストリア出身の映画監督。SFの古典的大作「メトロポリス」(1927年)、「ニーベルンゲン」(1924年) など。
- *5 ヨーエ・マイ (Joe May 1880~1954) オーストリア出身の映画監督。1911年監督デビュー。「アスファルト」(1929年)、「帰郷」(1928年) など。
- *6 ハリー・ラングドン (Harry Langdon 1884~1944) アメリカの無声喜劇スター。「初陣ハリー」(1926年)、「当りっ子ハリー」(1926年) など。